

大杉君の思想の一考察

和田久太郎

「往々僕等は、何故に殊に労働者の間に入つて彼等と事を共にせんとするのか、と云ふ質問を受ける。」

と、云ふ書き出しで、大杉はその論集「正義を求める心」の第三章「労働運動と個人主義」の中に、次ぎの如く述べてゐる。

「此の理由の第一としては、僕等は經濟的進化の傾向を觀て労働者が新社會建設の中堅たるべき事を知識するからである今日の資本家社會は、其の經濟制度の必然の結果として、即ち社會的生産と個人的分配との矛盾（論集「自由の先驅」中の「現代社會觀」參照）が益々増大するに従つて、遂に何等かの根本的改革を施さなければならぬ必要に迫られてゐる。此の改革は、今日の社會制度によつて何等かの特權若しくは利益

を享けてゐるものによつては、此の爲めに最も不利益を蒙るものによつて計畫され又實行されなければならぬ。

そして労働者は、此の地位にあると共に、更に社會の原動力たる生産其者を掌中に握つてゐる。彼等はたゞ欲しさへすればいゝのだ。

「此の經濟的及び社會學的理由は、僕等をして知識的に労働者の群れに投ぜしめる。しかし又、既に今日の社會制度によつて多少の利益と特權とを有する僕等の如き中産階級の徒が斯く労働者の群に投ずると云ふのは、此の知識的理由の外に更に他の重要な動機がある。

「此の知識と相俟つて發達したものであらうが、僕等には周圍の壓迫に就いての敏感と、其の壓迫に對する強烈な反抗本能とがある。そして此の敏感と反抗本能とが、先づ僕等を起たしめた、恐らくは第一の理由である。幼時からの、

父母や、年長者や、教師等の壓迫。學校を出てからの、世間や生活の爲めの壓迫。僕は僕自身の成長を顧みて、全く此の壓迫とそれに對する反抗との連續であつたかの如き感じをする。そして僕は、主として社會主義から得た社會學的及び經濟學的知識によつて、此等の壓迫の殆んどすべてが同一根柢から來る事を教へられ、且つそれに對する反抗を是認する道徳を教へられたのだ。

「同時に僕等は又、僕等の耳目に觸れる労働者階級の人々の無知と愚昧とに對して、一種の人道的熱情を感じざるを得ない。多くの社會主義者又は無政府主義者は、自己の受くる壓迫に就いてよりも、寧ろ先づ此の労働者の生活状態に憤激して、所謂労働運動に身を投じた事であらう。僕自身の行き方はこれと反對であつたやうだが、しかし其の僕としても、此の人道的感情には最高の尊敬を拂ひ、又僕自身にもそれが多分にある事を否めない。」

「けれども僕は、殊に最近の僕は、此等の諸理由によつてよりも、更に最後の他の一大理由によつて、労働運動に引きづけられてゐる事を感じる。そして此の理由が、最近の僕の、労働運動に對する態度を決定してゐるやうに思はれる。それは

クラボオトキンなどの著書によつても既に古くから僕の社會學的智識とはなつてゐたのだが、それが本當に僕の腦髓にも心臓にも深く浸み込んで來たのは、此の四五年以來の事である。即ち僕は、労働者の悲惨な生活に對する憐愍とか同情とかではなく、却つて其の生活の中に或る偉大なる力を見出して、其の力を讚美し、又自らも其の力の中に同化して、了ひたいと感ずるやうになつたのだ。

「五年以前の二年半ばかりの獄中生活（明治四十一年から三年に亘る千葉監獄時代）の間に、僕は少しく露西亞文學に親しみを覚えて、トルストイ（若くはダスタイエフスキイ）、トルゲエニエフ、及びゴリキイの各々の對平民的態度に就いて、僕にとつては甚だ興味深かつた、比較觀察をした事がある。そして殊に僕は、トルストイとダスタイエフスキイが平民の温順と忍辱とに、ゴリキイが平民の放恣と反抗とに、各各人生の眞理を認めた事に、最も興味深い對照を感じた。僕は、トルストイやダスタイエフスキイと共に、甚だ温順の徳を尊敬するのであるが、奴隸的境遇にあるものゝ忍辱は、却つて甚だしき不徳であると考へた。そして寧ろゴリキイの主人公の放恣と反抗とに強い同感を覺えた。

「兎に角僕は、獄中に於ける此等の文學書の影響と、及び其の以前から續けてゐたセンデイカリズムの研究とによつて、勞働者の有する強烈なる生活本能と、反抗本能と、及び其等の本能が行爲となつて現はれた結果の、偉大なる個人的及び社會的創造力に打たれたのだ。

『佛蘭西のセンデイカリスト等が、如何に刻苦して其の血と肉と骨とを以つて、自己及び其の自己の據るべき小社會を築き上げて来たかは、『個人主義と政治運動』（論集『正義を求めぬ心』の第三章）の中に詳説した。又先きに云つた勞働者同盟の組織の如きも、其の好適例である。

『僕はそれ等の事實を見て、勞働者の此の力を讚美すると共に、自らも亦此の力の中に同化し了りたい念を禁じ得なくなつたのだ。そして又、勞働者の間の此の力を感じて始めて、先きに云つた經濟的進化的傾向とか、勞働者が新社會建設の中堅となるとか云ふ智識が、本當に僕の全身に活躍して来たのだ。』

二

大杉の勞働運動に對する態度、及び其の思想發達の大體の

して、此の反抗の連續に伴ひつゝ、「主として社會主義から得た社會學的及び經濟學的智識によつて、此等の壓迫の殆んどすべてが同一根柢から來ることを教へられ、且つそれに対する反抗を是認する道徳を教へられ」て行つたのだ。同時に又、「經濟進化的傾向を觀て、勞働者が新社會建設の中堅たるべき事を智識」するに至り、更に「耳目に觸れる勞働者階級の人々の無知と愚昧と困窮とに對して、一種の人道的熱情を感じざるを得ない」やうになつて來たのだ。即ち彼は、かくして社會革命運動の渦中に身を投じたのだ。

中産智識階級出のすべての革命家達も、勿論幼時からの周囲の壓迫に就いての敏感はあつたらう。又、それ等の壓迫に對する多少の反抗もやつた事だらう。しかし乍ら、その反抗の中から叛逆者としての自己を育て、行き、それが後に革命運動に投ずるに至る根本的な動機となつてゐる者は尠ないのだ。彼等の多くが革命運動に投ずる理由は、その學び得た社會主義的諸學説であり、勞働階級に對する同情或は義憤である。幼時からの周囲のいろんな壓迫に對する反抗の経験は、ほんの僅かな潜在的動機でしかないのだ。従つて彼等が革命運動に身を投ずるの態度は、彼等自らの爲の革命運動で

経路は、彼れ自らが述べてゐる此の「勞働運動と個人主義」の一節が、最も簡單にして要を得てゐると思ふ。

中産智識階級の中から出て來る革命家は、自己が周囲から受ける壓迫に就いてよりも、寧ろ先づ勞働階級の悲惨な境遇に對する人道的な義憤から、及びその學び得た所の社會主義的諸學説の智識とから、革命運動の渦中に身を投ずる者の方が多い。我が大杉も、やはり此の中産階級の中から飛出して來た革命家の一人ではある。けれども、大杉が革命運動に身を投ずるに至つた動機には、他の中産智識階級の人々とは、些か異つたものがある。

即ち大杉には、その社會主義的諸學説を受け容れ、且つ勞働階級の奴隸的境遇に對する人道的義憤を發する前に、既に幼時からの、周囲の壓迫に就いての敏感があり、その壓迫に對する強烈な反抗があつたのだ。大杉が「僕は僕自身の成長を顧みて、全く此の壓迫とそれに對する反抗との連續であつたかの如き感じをする」と云つてゐる如く、それほど彼の個性は強く輝き、その生活本能は強烈であつたのだ。そして彼は、先づ此の反抗の連續の中から自己を見出し、育てて行つたのだ。叛逆者としての彼れ自身を創造して行つたのだ。そ

はなくして、奴隸的境遇にある勞働階級を救はんが爲めの革命運動であり、しかも其の學び得た經濟學的社會學的智識を以つて勞働運動を指導しやうといふ態度になり勝ちなのだ。彼等は其の學び得たる學問によつて勞働階級が來るべき新社會の中堅たる事を智識しながらも、猶且つ革命運動の方法や新社會の組立に關しては、眞摯なる態度を以つて勞働階級の創造力に訴えやうとはしないのだ。彼等が社會的眞實を把握し得たと信じてゐる其の學説の中には、猶ほ多くの中産階級的定心に囚はれた汚物——國家だとか權力だとか法律だとかの——が残存してゐる事を反省せず、それを其のまま勞働階級に押し付けやうとする。

しかし我が大杉は、やはり中産階級智識階級から出て來た一人ではあつたが、此の謂ゆる中産階級的定心には囚はれなかつた。

彼は革命運動に身を投じて以來、その激烈なる闘ひは、入獄又入獄を以つて報ひられた。そして、その奮闘と入獄とによつて、彼れの思想は益々練られて行き、その叛逆者としての人格は益々鍛えられて行つた。即ち彼の革命思想は、肉と骨との豊富なる實感によつて精彩を放つに至つたのだ。しか

し、労働階級に對する彼の態度は、やはり其の無知と愚昧と困窮とに對する憤激以上には出でなかつた。が、明治四十一年に赤旗事件で二ヶ年間入獄した前後、革命的サンジカリムの研究を進めるに従つて『佛蘭西のサンジカリスト等が、如何に刻苦して其の血と骨とを以つて、自己及び其の自己の據るべき小社會（C・G・Tの組織）を築き上げて来たか』を知り、『労働者の有する強烈なる生活本能と、反抗本能と、及び其等の本能が行爲となつて現れた結果の、偉大なる個人的及び社會的創造力』に打たれた彼は、又、ロシア文學にも親しみを覚えて、『トルストイやダスタイエフスキイが平民の温順と忍辱とに、ゴリキイが平民の放恣と反抗とに、各々人生の眞理を認めた事に、最も興味深い對照を感じた。』そして『トルストイやダスタイエフスキイと共に、甚だ温順の徳を尊敬するのではあるが、奴隸的境遇にあるものの忍辱は、却つて甚だしき不徳であると考へ、寧ろゴリキイの主人公の放恣と反抗とに強い同感を覺えた。』

即ち彼は、此處に至つて『労働者の悲惨な生活に對する憐愍とか同情とかではなく、却つて、其の生活の中に偉大なる力を見出して、其の力を讚美し、又自らも其の力の中に同化

して了ひたいと感ずるようになったのだ。』労働者の此の力を感じて、始めて『經濟的進化の傾向とか労働者が新社會建設の中堅となるとかいふ智識』が、本當に彼れの全身に活躍して来たのだ。此處に至つて、始めてその中産階級的な態度から飛出して、全然労働者の偉大なる創造力の中に彼れ自らを投じたいと希ふ様になつて来たのだ。

尤も、大杉をして此の態度を取らしめるやうになつたのは彼れの社會學的智識が亦與つて力あつた事も知らねばならぬ。何故なら、彼の社會學的智識をなしてゐる無政府共產主義は、實生活の上の觀察と實驗とによつて幾多の事實を歸納しつゝ、又人間を全人的に取扱ひつゝ社會的眞實を求めんとした、純正な科學的方法による一社會學だからだ。殊に其の社會進化の最大要素を人類の社會的憧憬に求め、社會的創造に頼つて、新勃興階級たる労働者中の最も活力ある分子の實際生活に其の結論を得てゐるからだ。しかし繰返して言ふが大杉は此の社會學的知識から先きに言つた労働者の放恣や反抗を『認め』たのではない。むしろ先づ、彼れ自らを得て来た叛逆的感情との強い『同感』を其處に覺えたのだ。此の社會學的知識から革命的労働運動に興味を覺えて来たものではあ

るが、しかし、サンジカリズムの研究を進めるに従つて、労働者の有する強烈なる生活本能や、反抗本能が行爲となつて現はれた結果の、偉大なる個人的及び社會的創造力に打たれた事が、より多く其の根柢をなしてゐる。言ひ替えれば、幼時からの周圍の壓迫に對する反抗の連續によつて自己を創造して来た、其の力を、彼れは労働者の中に、殊に労働階級の社會的創造力の中に、それを見出したのだ。そして彼は、その社會學的知識からよりも、むしろ此の同感的な氣持ちから労働階級の社會的創造力の中に身を投じ度く希ふやうになつたのだ。

三

其の著書『クロボトキン研究』の中で、大杉は斯う云つてゐる。『又、僕は斯くながながとクロの世界觀を説いて来たものの、實のところ、そんなこけ嚇しの世界觀などはどうでもいふんだ。クロ自身にだつて、此の世界觀があつて、始めて其の社會觀が出来たのぢやない。世界觀の前に社會觀があつたんだ。そして其の社會觀の前にも又何者かあつたんだ。それはクロ自身だ。クロ自身の強い感情だ。クロの世界觀や

社會觀は、此の強い感情に基いて、それをたゞ科學的に理屈づけたものだ。クロの社會哲學の本當の値打は其處にある。』僕の此の一文も 要するに大杉の思想に對して此のことを言ひたかつたのだ。即ち、大杉の異彩ある思想のすべては、その幼時からの周圍の壓迫と戦ひつゝ、彼れ自らを創造して来たところの、彼れの個性の強さが、大杉自身が、大杉の強い感情が、その根本をなしてゐる——と言ふ事をだ。そして殊に、彼れが革命的サンジカリズム運動への同化を主張したのは、その無政府共產主義の社會學的智識からよりも、むしろ革命的サンジカリスト等の個人的或は社會的の偉大なる創造力と、彼れ自分の強い感情との一致融合が重きをなしてゐる——といふ事をだ。

此の意味に於いて 『クロボトキンを本當に知るには 其の名著の「パンの略取」や「相互扶助論」やを讀むよりも、何によりも先づ其の自叙傳「一革命家の思出」を繕かなければならない』如く、大杉の思想を本當に知らうといふには、やはり先づ彼の『自叙傳』と『獄中記』とを讀まねばならぬと思ふ。大杉の『自叙傳』は、惜しいかな、未だ漸く彼れが

と彼れは言つた。

—(七ページから続く)—

社會主義運動に身を投じたといふ所までで終つて了つてゐるが、しかし、軍人の家庭と其の教育。彼れの個性の強さと少年時代の亂暴。幼年學校に於ける反抗の連続。上京してからの思想の變化して行つた経路。つまり、彼れが幼時から如何にして自己を創造して來たかを知るには、この書物を讀めば明らかだ。それから、大杉が革命運動に身を投じて後ち、その思想を如何にして血と骨との上に築き上げて來たかを知るには、『大杉といふ人間』を如何にして血と骨との上に築き上げて來たかを知るには、彼の名著『獄中記』を讀めばいい。大杉は、此の本の中で、次の如く叫んでゐる。

「僕は監獄で出來上つた人間だ。牢獄生活は廣い世間的生活の縮圖だ。しかも其の要所々々を強調した縮圖だ。そして此の強調に對するのに、等しく又強調された心理状態を以つて向うのだ。これ程いゝ人間製作法が他にあらうか。」